

# 図式的投影法を用いた母親の家族認識(4)

— 育児場面における母親の感情と家族への評価 —

## Mother's Perception of Her Birth Family Using Schematic Projective Techniques (4)

— Mother's Emotions during Childcare and Evaluation of Support from the Family —

小林 麻子\*・会沢 信彦\*\*

Asako KOBAYASHI, Nobuhiko AIZAWA

### 1. 問題と目的

本研究は、女性が家族体験を通して母親になっていく過程を、図式的投影法を用いて主観的に捉えようとするものである。図式的投影法は、体験と意識といった主観的世界を含む人間全体にアプローチしようと水島により考案された、概念領域からイメージ領域を含んだ投影法である(水島, 1979)。図式は現実世界の論理的概念的解釈を含み、同時にそのように理解された世界に対する感情、被験者自身の様々な欲求を含む(上杉, 1984)。家族の中で生まれた女性は両親に育てられ、成長すると親から離れ自らの家庭を持つ。やがて妊娠、出産を経て母親になり、子どもを育てる。本研究では、こうしたライフサイクルの中で母親が感じていることを、図式を使って語ってもらう。第一報(小林・稲越・会沢, 2009)では、幼少期から青年期の家族関係の変化が図式にどのように表現されているのか分析した。第二報(小林・稲越・会沢, 2010)では、成長とともに変化する家族に対する意識や両親への感情を、駒どうしの距離をもとに分析した。第三報(小林・会沢, 2011)では、結婚、妊娠、出産を通して、母へと変化していく意識や夫との関係を分析した。

本稿では育児場面を扱う。近年の日本では、核家族化、少子化が進み、私たちが育児の場面に接する機会は少なくなっている。以前ならよく見かけた母親が子に授乳する姿や、母親が泣きやまぬ子を背負って夜道を歩く姿を、今ではほとんど見かけなくなった。家の中からも地域からも子育ての風景は遠のき、子どもに振り回されている母親を周囲が気の毒に思う、そんな光景に出合うチャンス自体が失われている(広岡, 2004)。多くの母親は子どもに接した経験がなく、具体的な育児の知識もほとんど持ち合わせていない。出産前に「赤ちゃんかわいい」「愛情いっぱい

\* こばやし あさこ 文教大学生生活科学研究所客員研究員

\*\* あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部

で育てる」と語っていた母親（小林・会沢, 2011）は、出産後、現実の子どもから喜びだけでなく、不安や怒りといったネガティブな感情も与えられる。

本稿では、思い通りにならない育児の中で母親が体験している感情、夫や家族の対応への評価を図式から分析し、母親に必要な支援はどういうものなのか考察する。

## 2. 方法

### (1) 調査協力者

東京の私立保育園の父母会と東京近郊の育児グループに依頼。応じてくれた3歳～5歳の子どもをもつ母親8人を対象にした。

### (2) 調査期間および実施場所

実施期間は2000年9月から11月にかけて。実施場所は調査協力者の都合に合わせたため、調査協力者の自宅、調査者の自宅、本大学院の実習室となった。

### (3) 調査方法

#### i) 家族関係単純図式

直径2cmの円形の駒を家族の人数分用意し、家族の構成員の名前を記入する。B5判の白紙縦に直径10cmの円枠（家族の枠）を作り、家族の駒をそれぞれ自由に移動させながら「ピッタリ」と思える位置に置く。

#### ii) カード式自己像単純図式（自己像単純図式に感情カードを併用した複合図式）

B5判の白紙縦に上部が開いた直径10cmの円枠を作り、円枠の上部2cm上に対象カードを置く。直径2cmの円形の駒を自己の核とし、対象に対して「ピッタリ」と思える位置に置く。さらに感情語（Pulchik, R.の感情8語を漢字1文字に置き換えたもの「喜、悲、望、恐、愛、嫌、怒、驚」を用いる）が記された2cm四方の感情カードを、その対象に対して配置する。

#### iii) 環境調査

家族構成、子どもの保育状況、夫の育児、家事参加度とそれに対する母親の満足度について、質問紙調査を行った。

### (4) 手続き

図式的投影法では、人生のステージごとに質問項目を設定し（表1）、その項目を対象カードとして家族関係単純図式、あるいはカード式自己像単純図式を作成してもらった（図1）。実験者は被験者に「(対象に対して)駒を自由に動かして、自分がピッタリと思うたら、そこにのりづけして下さい。」と指示する。図式作成後に当時の家族の様子を

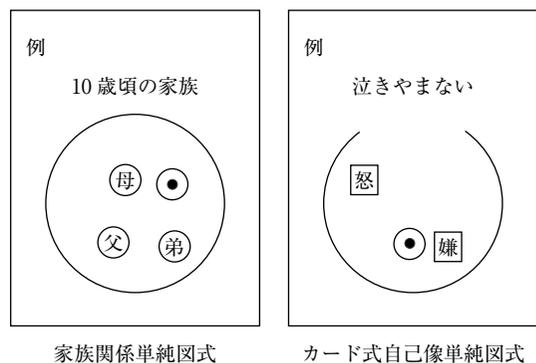


図1 調査で使用した図式

語ってもらう。質問は幼少期から現在まで時系列に提示する。本稿は、ステージ3 乳児期、ステージ4 幼児期（カード式自己像単純図式、家族関係単純図式）を対象にする。環境調査は、調査票を被験者に渡し、後日調査者が回収した。

表1 質問項目一覧

ステージ	質問項目	ステージ	質問項目
1 子どもから青年期	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもと同じ年頃の家族</li> <li>10歳頃の家族</li> <li>18歳頃の家族</li> <li>18歳頃 母</li> <li>18歳頃 父</li> <li>青年期の友人</li> </ul>	4 幼児期 (2歳頃～5歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>なかなか寝てくれない</li> <li>ぐずぐずする</li> <li>飛び跳ねたり叫んだり暴れたり</li> <li>私の言った通りやってくれない</li> <li>かんしゃく</li> <li>おもらし</li> </ul>
2 結婚から出産	<ul style="list-style-type: none"> <li>新婚時代</li> <li>妊娠を知った時</li> <li>妊娠後期</li> <li>子どもが産まれた時</li> </ul>	5 第二子以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>第二子以降の妊娠を知った時</li> <li>第二子以降の出産後</li> </ul>
3 乳児期 (0歳～1歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>初めて目が合って微笑んだ時</li> <li>どうしても泣きやまない</li> <li>私の作った離乳食を食べてくれない</li> <li>後追い/抱っこ</li> </ul>	6 現在	<ul style="list-style-type: none"> <li>夫</li> <li>子ども (ひとりひとり)</li> <li>現在の家族</li> <li>理想の家族</li> </ul>

### 3. 結果

調査に協力してくれた母親のプロフィールは表2の通りである。調査では、第3ステージ（乳児期）第4ステージ（幼児期）の項目全てを実施したが、紙面の都合上、本稿では「初めて目が合って微笑んだ時」「どうしても泣きやまない」「私の作った離乳食を食べてくれない」「私の言った通りやってくれない」の4項目について報告する。母親の作成した図式については「初めて目が合って微笑んだ時」「どうしても泣きやまない」「私の言った通りやってくれない」の3項目を図2に示す。

表2 母親のプロフィール

	年齢	原家族	職業 結婚前/現在	現在の家族
A	30代前	父・母・妹（3歳下）	教員	夫・長男（7歳）・長女（5歳） 次男（0歳）・姑
B	30代前	父・母・弟（3歳下）	看護師/教員	夫・長男（4歳）・次男（2歳）
C	30代中	父・母・弟（4歳下）	会社員/なし	夫・長女（3歳）
D	30代中	父・母・妹（双子）	会社員/会社員	夫・長女（4歳）
E	30代前	父・母・妹（3歳下） 弟（8歳下）	会社員/なし	夫・長男（3歳）・長女（3歳） *双子
F	20代後	父・母・長兄（4歳上） 次兄（2歳上）・祖父・祖母	なし/学生	父・母・次兄・長女（3歳）
G	30代後	父・母・弟（3歳下）	会社員	夫・長女（3歳）
H	20代後	父・母・妹（3歳下）	会社員	夫・長女（4歳）・長男（2歳）



図2-1 母親の作成した育児場面に対する図式

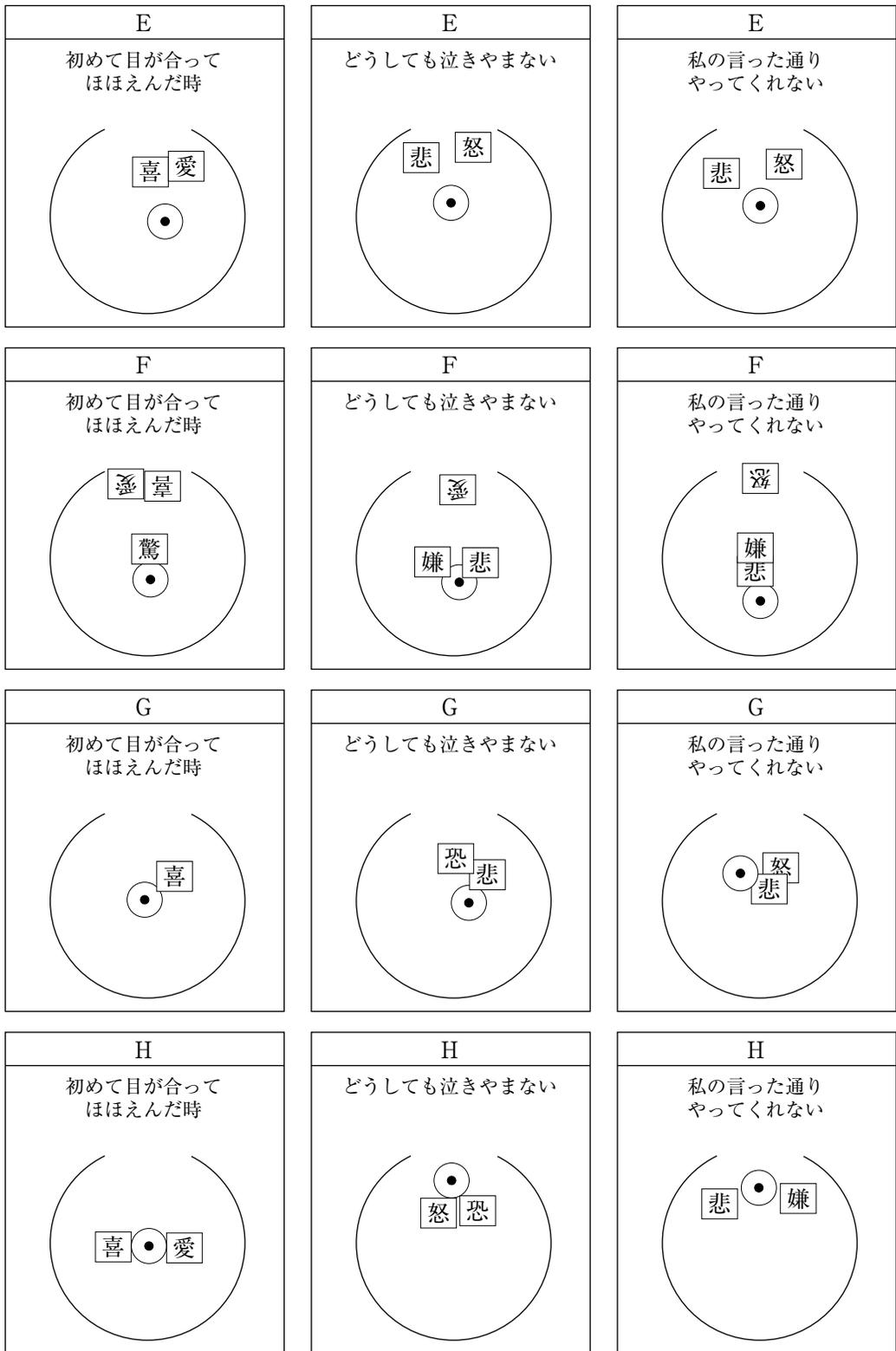


図2-2 母親の作成した育児場面に対する図式

表3-1 育児場面の図式の説明（カード式自己像単純図式）

	感情カード	内 容
初めて目が合って微笑んだ時	A	喜・愛・驚 なんてかわいいんだろう、子どもの笑い声って。涙が出るくらいうれしかった。夜泣きして寝なかった時期に笑ったというのが、すごくうれしかった。
	B	喜・愛 笑ったね笑ったねという感じ。夫と二人で。かわいいなって思う方が… 反面泣きやまなかったから。
	C	喜・愛 うれしかった。うれしいな、かわいいなって。
	D	喜・愛・驚 「ああ、笑ってくれた」という驚きと、「かわいい」という気持ち。
	E	喜・愛 お母さんってわかっているのかなって思いつつ、かわいくてうれしかった。
	F	喜・愛・驚 やっぱり自分がお母さんなんだ、この子の親なんだなって実感したので、その時はすごく一体感みたいな、引き付けて子どもを捉えている。子どもと私が重なっている。
	G	喜 うれしい、ただ。生物だったのかなあと思いました。
	H	喜・愛 心配性なところがあって、知識だけは得ようと本を読んだり話を聞いたりするから頭でっかちになって。こうしたら目が見える、耳が聞こえるってということばかり気にしていた。目が合って笑ってくれた時には「ああ、良かった！」という安堵と喜び。笑ったということは目が見えているんだと。かわいいよりも先に、良かったと思った。
どうしても泣きやまない	A	悲・怒・嫌 ミルクは何時間おきとか育児書通りにやっているのに泣きやまない。こんなに一生懸命抱っこしているのに何で泣き止んでくれないのと泣けてきちゃう。子どもなんていない、嫌だという気持ち。何が不満であんたは泣いているのって。夜寝てくれない時はもう一度お腹に入って欲しいと何度も思った。
	B	怒 ミルクもあげたしオムツも濡れていないし熱もない。怒り怒り怒り。疲れるし寝たいし。子どもなんていないと思ったりする。どれだけ泣かせたら自然に寝るんだろう、なんでこの子はこうなんだろう。
	C	悲・愛 なんで泣きやまないんだろう。私も寝たい。泣きたいのはこっちだと思う。近所にうるさいかなとか。
	D	悲・嫌・驚 これがうわさに聞いていた夜泣きなんだと、初めて体験した驚き。やっぱり泣かれると嫌だという気持ちと、泣き声を聞いていると悲しくなってくる気持ち。
	E	悲・怒 毎日、一日中だったのでほんと疲れた。なんで1時間も大声で泣いていられるの！ 聞いている方が本当にイライラする。双子なので一人を抱っこするともう一人がほったらかしになる。双子でなければ抱っこしてもらえたのにといいところが悲しみ。
	F	悲・嫌・愛 3か月くらいまで一晩中寝なかった。母親として嫌になってしまう自分が嫌。これで母親なのか、大丈夫なのかという不安と、上手く子どもをあやすことができない悲しさ。ああ思い通りにならない、別なんだと思う時もある。
	G	悲・恐 悲しいのと、こんなに泣いて死んじゃうのではないかって恐かった。生物として平気なのかな、こんなに泣いて呼吸困難にならないのかと。
	H	怒・恐 なんで泣いているのかわからないことが多かった。近所迷惑になるしまわりがすごく気になって、どうしようという恐怖。自分に余裕がなくなってくると、何で泣き止まないのよ！ という怒り。母は「ミルクをあげれば」と言うけれど、私は「3時間経ってない！」産院では「母乳がでていからミルクは絶対あげちゃダメ」と言われるけど、泣かれるとやっぱり足りていないのかなって不安にさいなまれて。
私の作った離乳食を食べてくれない	A	悲・怒 本にも書いてあるので仕方ないという気持ちと、一生懸命作っていたので「ふざけるな！」という気持ちと「頼むよ、食べてよ」という気持ち。
	B	悲・怒 「私の作ったものが食べられないのか！」という怒り。当時は大きくなれば食べるようになるという感覚が信じられないから、何で食べないんだって必死。さじを子どもの口に押し込んだ。夫は何でも普通だと言うけれど「そんなことはない、こいつは特別だ」って思った。
	C	悲・愛 手をかけて作って食べてくれないと悔しい、悲しい。でも新婚時代、夫が私の料理を食べてくれなかったのでも今さらそんなに思わない。むしろ子どもの方が食べてくれた。
	D	驚・喜・愛 離乳食は最初みんな食べないと聞いていたので、食べてくれた時は、この子は他の子と違うんだって。喜んで食べてくれているんだと思ったり、かわいいなって。
	E	嫌 嫌というが大変だった。(双子なので) もうちょっと待っててよ～！ という感じ。
	F	悲・怒・愛 私の中ではずっと一緒につもりなんだけど、こういう時に「あ！ 違うんだ」「自分の思い通りになるわけじゃない」と感じる。
	G	悲・恐 食べてくれないから悲しいのと、食が細くて体が小さかったので、こんなにちっちゃくて大丈夫なのかという恐怖心があった。もう少し大きくなってからは、生物としてそれぐらい食べれば大丈夫なのかと。育っているし、細くなってないし。
	H	怒 アトピーがあり、神経を使ってやっとできたと思ったら食べてくれないと、もう怒りが先に立つ。子どもを心配するより自分の感情が先に出て、言ってもわからないのに「食べないなら作ってあげない！」と言ってしまう。無理やり口の中に押し込む。口を開けてスプーンを入れて口を閉じて出せないようにしたり。その時は必死で。

表3-2 育児場面の図式の説明（カード式自己像単純図式）

	感情カード	内 容
私の言った通りやってくれない	A 怒・悲	日常茶飯事。ありすぎてイメージできない。怒っているんだけど悲しいとかあきらめに近い。まだ、3つ4つだしなあとか、こういう性格なのかなとか、私もそうだったのかなとか、しょうがないのかなって。
	B 怒・悲	何でこの子に伝わっていかないんだろう。耳が悪いのかしら、頭が悪いのかしらって。子どもは別の人格だから仕方ない、子どもを支配しようとする行動だと思いつつも、「どうして毎日言っていることがわからないんだよ」って。
	C 怒・嫌	時間に押されている時はちょっとイライラする。まだ、言った通りにできる歳でもないと思うので、「嫌だな」「まったく」と怒りの感情はあっても、それを表に出すことはないぐらいの感じ。
	D 怒・驚・嫌	こんなに大きくなっているのになぜ出来ないんだろうという驚きの気持ち。友達と言われなくても進んでお片付けしているのに、どうしてこの子は出来ないんだろう。言った通りに動いてくれないんだろう。なせなんだろうと考えさせられる。
	E 怒・悲	怒りはあるけれど、自分のやりたいことがはっきりしている、成長の一過程と思ってあきらめるようにしている。自我の芽生えと言うことで。それでも他の子どもはみんなやっているのに自分の子どもだけやってくれないと、自分は上手くしつけないのかと悲しくなる。自分の意見を言ってくれちゃって、こんな小さいのにいろいろ考えているのねと思うことはある。
	F 怒・悲・嫌	母はそういう時に気分転換させるのが上手い。私をもっと賢ければ、私が怒って子どもが泣いてという悪循環はないだろう。「ア～ア…」というのと、そんなことでイライラしている自分が悲しい。疲れてくると悲しいというより落ち込んじゃう。
	G 怒・悲	何かを教えている時に言った通りやってくれないと怒り。この子は学問に向いていないのかなという悲しみ。わざと違うことをやっている時もあるので怒り。「どうして言うことを聞かないの！」でもその場限りの怒り。
	H 悲・嫌	こっちが一步降りればいいと思うんだけど、いつまでも待つてられないし。こんな小さいうちから言うことを聞かないと、この先どうなるんだろうと、先を思って悲しくなる。自分に余裕がないと、子どもがいなければもっと自由になれるのって。子どもはかわいいんだけど、とっさに「ああもう嫌だ」「一人になりたい」と思う。

表4 育児場面に対する母親の感情（カード式自己像単純図式）

	感情カード	内 容
笑いが合んだ時	喜 (8人)	・うれしい (A, C, E, F, G) ・かわいい (A, B, C, D, E, F)
	愛 (7人)	・目が見えているということだから良かった (H) ・お母さんってわかっているのかな (E) ・この子の親なんだって実感した (F)
	驚 (3人)	・なんてかわいいんだろう (A, F) ・笑ってくれた (D)
②どうしても泣きやまない	悲 (6人)	・泣きやんでくれない (A, C, D, G) ・寝たい、疲れた (C, E) ・近所にうるさい (C) ・上手く子どもをあやせない (F) ・双子なので片方がほったらかしになる (E)
	怒 (4人)	・なんで泣きやまないの (A, B, E, H) ・泣きやませられない自分 (A) ・協力してくれない夫 (A) ・イライラする (E)
	嫌 (3人)	・子どもなんていらぬ (A) ・泣かれると嫌 (D) ・嫌になってしまう自分が嫌 (F)
	恐 (2人)	・呼吸困難にならないか (G) ・近所迷惑にもなりどうしていいかわからない (H)
	愛 (2人)	
	驚 (1人)	・夜泣きを初めて体験した時の驚き (D)
③私の作ってくれぬ食を	悲 (5人)	・手をかけて作ったのに食べてくれない (A, B, C, F, G)
	恐 (4人)	・何で食べてくれないの (A, B, F, H)
	驚 (2人)	・好きな味付なのにどうして食べないのだろう (C) ・食べてくれてこの子は他の子と違う (D)
	喜 (1人)	・喜んで食べてくれた (D)
	愛 (1人)	・食べてくれてかわいい (D)
	嫌 (1人)	・よく食べるので、食べさせる方が追い付かず大変 (E)
恐 (1人)	・こんなにちっちゃくて大丈夫なのか (G)	
④私の言った通り	怒 (7人)	・時間に押されている時はイライラする (C) ・その場限りの怒り (G)
	悲 (6人)	・あきらめに近い (A) ・何でこの子に伝わらないのか (B) ・上手くしつげができていない (E) ・私が怒って子どもが泣いて悪循環。こんなことでイライラしている自分が悲しい (F) ・この子は学問に向いていないのかな (G) ・今からこれで、この先どうなるんだろう (H)
	嫌 (4人)	・嫌だな (C) ・イライラしている自分に落ち込む (F) ・一人になりたい (H)
	驚 (1人)	・友達はできているのになぜできないんだろう (D)

## (1) 育児場面における母親の子どもへの感情

母親の使用した感情カードおよび、図式の説明の要約を表3に示した。項目ごとに感情カードを集計し、内容を分類したものを表4に示した。

### i) 初めて目が合って微笑んだ時(乳児期)

表4の①より、母親が使用した感情カードは「喜」「愛」「驚」だった。「喜」は全ての母親が使用した。7人が「喜」と「愛」の両方を使用した。

H以外の母親は子どもの笑顔のかわいさに反応している。子どもが母親に向けて微笑んでくれたと考え、母親を認識してくれたことを喜んだり愛しく感じたりしている。それに対して、Hは子どもの笑顔を子どもの目が見えている証拠と捉えて喜んでいる。

### ii) どうしても泣きやまない(乳児期)

表4の②より、母親が使用した感情カードは「悲」「怒」「嫌」「恐」「愛」「驚」だった。全ての母親が「悲」「怒」のどちらかを使用した。「悲」「怒」の両方を使用したのは1人、「悲」「嫌」は2人、「悲」「怒」「嫌」を使用したのは1人だった。

何をやっても泣きやまない子どもに、疲れ切って途方に暮れている様子を「悲」で表した母親は多い。泣き続ける子どもを泣きやませようと母親はあらゆることをやってみるが、それでも泣きやまない子どもに対して、怒りを感じたりうんざりしたりしている。「恐」を使用したGは、激しく泣き続ける子どもが呼吸困難で死んでしまうのではないかと恐れている。Hは産院から厳しい授乳指導を受けているので、子どもが泣いても授乳できず、近所からの苦情を恐れている。

### iii) 私の作った離乳食を食べてくれない(乳児期)

表4の③より、母親が使用した感情カードは「悲」「怒」「驚」「喜」「愛」「嫌」「恐」だった。子どもが離乳食をよく食べたと言うDとEを除いた全ての母親が、「悲」「怒」のどちらかを使用した。「悲」「怒」の両方を使用したのは3人、「怒」「嫌」は2人、「悲」「嫌」は1人だった。

一生懸命作った離乳食を拒否された時の母親の反応は「何で食べてくれないの?」という悲しみと、「何で食べないの!」という怒りだった。食べないと育たないという不安もある。BとHは子どもの口に無理やりスプーンを押し込む。Gは子どもがちゃんと育たず死んでしまうのではないかと恐れている。

### iv) 私の言った通りやってくれない(幼児期)

表4の④より、母親が使用した感情カードは「怒」「悲」「嫌」「驚」であった。「怒」「悲」を両方使用したのは5人、「怒」「嫌」は2人、「悲」「嫌」は1人だった。

使用された感情カードは「怒」が7人で一番多かったが、図式の説明で多く語られたのは「悲」だった。自分の気持ちが子どもに伝わらない、自分はしつけが上手くできていない、といったことが「悲」で表現されている。母親は言うことを聞かない子どもに怒りを感じながら、子どもの頑固な意志の前に、自分の無力さを感じたり、うんざりしたりしている。

## (2) 家族に対する評価

母親の家族認識を表5に、夫の家事、育児参加に対する評価を表6に示した。

### i) 乳児期

表5①より、A、Bは育児の苦しみをわかってくれず、子どもに味方する夫に強い不満を持っている。C、Dは仕事で忙しい夫をあてにしていないが、Cは夜泣きで大変な時に夫が代わってくれたことを評価している。Eは双子で、夫が家にいる時は子どもを一人みてくれ

表5 母親の家族認識（家族関係単純図式）

	① 乳 児 期	② 幼 児 期
A	夫に食べないと話しても「仕方ないよな」私の気持ちをわかってくれない。手伝ってくれるわけでもない。	夫は普段やらないけど、どうしようもない時はやってくれた。やらないけど見てくれる安心感はある。
B	夫は私が無理に食べさせようとする「食べなきゃ食べないでいい」と言う。腹が立った。	夫は子どもがうるさくても気にしない。私みたいにしつこく言わない。子どもを誉める。子どもはお父さん大好き。でも私は嫌。しつけなければいけない時なのに怒ってくれない。
C	夫は義務的というよりはむしろ自分から子育てに参加しようとする。	夫がいる時は、手伝ってくれるので子どもに対して怒りの感情が起きにくい。
D	夫は仕事をしているので、帰宅したらみてくれるけれど、いつも私が子どもを見ている。	夫に子どものことを話しても、子どもの味方をするので怒り爆発。私がいくら訴えても、夫は聞いてくれない。
E	夫が帰ってくると「一人お願い」と渡す。一人は抱っこしていれば機嫌が良かったので。夫は私の補佐。	夫は自分の趣味ばかり。子どもを見ていないことが多い。私が事細かに指示しないと動かないところが嫌。
F	夫は単身赴任で距離がある。母がいてくれたことで救われたり、教えられたり。子育てが上手く行くことが多かった。	母のようにもっと賢くあれば、私が怒って子どもが泣いてという悪循環はないんだろう。
G	私と夫が味方で、チームを組んで子どもに相手しているという感じ。	夫は「どっちでもいいじゃない」とう感じだが、どちらかと言うと私に付いている。一方が怒ってももう一方がフォロー。でも私が夫に「それはかわいそうだよ」と責められることも。夫は寛容。
H	・夫は食べてくれなかったらどうしようと思わない。かわいがりながら気長にやるから子どもも口を開ける。 ・そばにいる母に頼ることが多い。良い逃げ場。 ・料理好きの妹が作った離乳食を子どもが食べてくれると、何で自分は出来ないんだろうと思う。	夫は「いいじゃないか、元気で」と子どもを怒らない。注意はするけれど、頭ごなしには怒らない。私は何で怒らないの！って二人でけんかになる。夫の株が上がって、私は子どもを持っていかれる気がする。

表6 夫の家事、育児に対する母親の評価（現在）

	仕事の有無	保育園/幼稚園入園年齢	夫の家事参加	夫の育児参加	評価	子どもと遊ぶ	育児に当たっている人とその割合
A	有	1歳0か月	少ない	普通	基本的に満足	時々ある	母70% 祖母20% 父10%
B	有	1歳7か月	多い	多い	基本的に満足	よくある	母50% 父40% 祖父母10%
C	無	—	普通	普通	基本的に満足	時々ある	母85% 父5% ママ友10%
D	有	3歳7か月	少ない	普通	基本的に不満	よくある	母80% 父20%
E	無	-	少ない	少ない	基本的に不満	時々ある	母95% 父5%
F	有	3歳1か月	—	—	—	—	祖母70% 母30%
G	有	5か月	普通	普通	基本的に満足	よくある	母33.3% 父33.3% ベビーシッター33.3%
H	有	6か月	少ない	多い	家事：不満 育児：満足	よくある	母65% 祖母35%

たり、補佐役をしてくれたりしたことは評価している。Fは夫が単身赴任中で、母の手助けによって育児が上手く行ったと感じている。Gは夫と自分が一つのチームのようにして子どもに関わっていると考えている。Hは夫や妹が上手くやってくれると、できない自分に落ち込んでしまう。

## ii) 幼児期

表5②より、Aは夫が家事や育児はしなくても、自分の状態を見ていてくれると感じている。B、D、Hは夫が子どもに寛容で、子どもを怒ってくれないことに強い不満を持っている。Gの夫も子どもに寛容だが、Gは夫が子どもではなく自分の側についていると感じている。Cは夫が家にいる時は手伝ってくれるので、子どもに対する気持ちが安定すると感じている。Eは夫が家族に関心を持っていないことに不満を持っている。Fは母のようにできない自分に落ち込んでしまう。

## iii) 夫の家事、育児参加に対する評価（現在）

表6より、共働きで夫の家事、育児参加度の低いA、D、Hは、Aが夫に満足、D、Hは不満と評価が分れた。Aは家事について夫に期待していない。育児は日々の実際的なものより精神的なものを重視している。D、Hは、夫が子どもとよく遊んでくれることは評価しながらも、家事をしてくれないことに不満を持っている。B、Gにとって、夫は家事、育児を一緒に担う存在である。夫婦でほぼ同等の分担をしており、評価も満足となっている。

C、Eは専業主婦で、夫の家事、育児の参加度は低い。しかし、Cが夫に満足と評価しているのに対して、Eは不満となっている。これは実際に関わる家事や育児の量というよりは、夫の姿勢に違いがあるものと考えられる。

# 4. 考 察

## (1) 育児場面における母親の感情

育児の葛藤場面では、多くの母親が「悲」「怒」カードを使用した。悲しみと怒りは表と裏の関係になっていることが多く、これは母親が状況をどの側面から見るかで変わってくる。母親の努力が報われない、あるいは母親の要求と子どもの要求が対立する状況を「子どもが私を拒否している」と捉えて、自分を拒否する子どもに怒りを感じたり、拒否された悲しみを感じたりしている。「嫌」カードは「悲」「怒」に次いで多く使われていた。悲しみや怒りと一緒に使われることが多く、母親が置かれている状況、あるいは巻き込まれている感情から解放されたいという気持ちを表している。「恐」カードを使用したのはGとHのみであったが、彼らの恐れは多くの母親に共通している。Gの恐れは、育児経験者であれば何でもないことが、経験のない母親にとっては大きな不安になることを示している。また、Hの場合、専門家による指導や知識が本人に不安を与えている。育児にまだ自信のない母親にとって、専門家の言葉は絶対的なものである。ところが上手くいかない、母親は身動きが取れなくなってしまう。

母親は育児の中で大きな喜びも経験している。「初めて目があって微笑んだ時」は、母親と子どもが初めて二人の人として交流する瞬間である。生後8週、乳児は質的变化を起こし、直接的な目と目の触れ合いを始める。それから少しすると、何かに反応して、あるいは誰かの笑いを受けて頻回に笑うようになる (Stern,1998)。これを「あなたの赤ん坊があなたを一人の人として

気付くようになった」と Winnicott (1964a) は表現する。本稿の母親も子どもが自分を見つけてくれたと感じて喜んでいる (E: お母さんってわかっているのかな F: この子の親なんだって実感した)。母親にとって子どもは愛おしく、かけがえのない存在であると同時に、母親を拒否し、苦しめる存在でもある。母親の中にはいくつもの感情が複雑に入り混じっている。

## (2) 夫や家族に対する評価

母親は育児の悩みを夫や家族に相談し、時には彼らに助けを求めらうが、それが母親の満足するものであるとは限らない。例えばAは、子どもが離乳食を食べてくれないことを夫に訴えるが、夫は「仕方ないよな」と言う。離乳食を無理やり子どもの口の中に押し込もうとするBに、夫は「食べなきゃ食べないでいいじゃない」と言う。夫の言葉はAとBを怒らせる。それは子どもの側に立ったものであり、AとBは夫が自分の気持ちをわかってくれないと感じている。

育児経験豊富なFの母親はFの育児を助けてくれる。料理の得意なHの妹は、離乳食を食べない姪のために離乳食を作ってくる。夫は休日、子どもに離乳食を食べさせてくれる。すると普段は食べない子どもが口を開けて食べる。家族はFとHを助けようとしているのだが、FとHは家族に感謝しながらも、上手くできない自分に落ち込んでいる。家族が上手くやってしまうことで母親としての自信を失うからである。

幼児期になると子どもは動きが活発になり自己主張も始まる。B、D、Hはしついで夫と意見が合わない。もっと子どもを叱って欲しいのに夫は子どもに寛容である。子どもを誉める、頭ごなしに怒らない。子どもたちは夫が大好きである。一般的に考えれば夫の行動は正しいが、B、D、Hは怒っている。しかも、夫と子どもがくつつくのでB、D、Hは家族の中で孤立する。Gの夫も子どもに寛容である。Gは夫から「子どもに厳しすぎる」と責められることもあるが、Gは夫が自分の側にいると感じている。Gは夫とチームを組んで子育てをしていると認識している。

## (3) 母親に対する援助の在り方

今回の調査では特に育児の問題を抱えていない母親を対象にしたが、それでも、母親への援助を考える上で重要と思われる二つの問題が見えてきた。第一の問題は、専門家によって生み出される母親の苦しみである。育児経験のない母親にとって医療機関の指示は絶対的である。指示に従わないことで取り返しのつかないことになるのではないかという恐れがある。そのため、子どもが指示通りに動いてくれないと母親は不安になったり、従わない子どもに怒りを感じたりする。不安や怒りが強くなると常軌を逸した行動を取ってしまうこともある。Winnicott (1964b) は、子どもとどのように関わっていくか自分なりのやり方を見出そうとしている母親に、専門家が干渉して困難を引き起こしていると指摘する。

第二の問題は、夫や家族の関わりによって生み出される苦しみである。母親は育児の楽しいことだけでなく辛いことも夫と分かち合いたい。母親は苦勞をわかってもらいたくて話しているのに、夫が子どもの側に立って正論を言ってしまうと、母親は気持ちの持っていくようがなくなり、辛い気持ちを抱えたまま育児をすることになる。あるいは、手に負えなくなりつつある子どもを抑えるため、夫には母親の權威の支持者になって欲しいのに、夫が子どもの側に立ってしまうと、母親の立場はなくなってしまう。母親の女性親族(母や姉妹など)が援助する場合には、彼ら自身の母性本能が目覚め、母親の本能を補強するのではなく、競い合ってしまう

ことがある。「私の方がうまくできる」という思いがあると、慣れない母親に手を出してしまう(Winnicott,1964a)。そうすると母親は感謝するべきだと思いつつも、落ち込んだり釈然としない思いが残ったりする。

子どもが必要としているのは、いつでも子どもの欲求を満たそうとしてくれる誰かの存在である。母親は子どもが何を望んでいるのか理解するために、子どもに意識を集中させなければならぬ。母親が安心して子どもに専心できるよう援助するのが周囲の役割であるが、実際は母親を混乱させていることも少なくない。その混乱が母親を苦しめ、その母親の苦しみに対する無理解がさらに母親を苦しめるという悪循環が本稿の調査の中から見えてきた。また、母性本能の競い合いは、個人だけではなく、社会としても行われているように感じる。例えば「家庭の教育力の低下」を訴える人たちは、彼らの無意識の中に自分たちはもっと上手くやっていたという気持ちが潜んでいるかもしれない。

母親に必要なのは、母親が自分で判断するための情報である。援助者の役割は母親の混乱を取りのぞき、母親が子どもとの関係に自信を持てるようにすることである。ところが、現在の子ども中心の育児指導では、母親の努力は過小評価され、子どもの問題は母親の責任とみなされるので母親は追いつめられてしまう(広岡,2004)。子どもの夜泣きが続いてつらい時、AとCは夫が黙って子守を引き受けてくれたことを評価している。AとCは夫の自分に対するやさしさを感じ、それがAとCの心に余裕を与えている。Cは夫がいる時は子どもに対して否定的な感情が起きにくいと語る。これは、育児援助がまず母親中心に行われるべきであることを示唆している。母親に対する思いやり、苦労への共感が母親の心に余裕や安心感を与え、それが母親と子どもの関係に良い影響をもたらしていると考えられる。

## 引用文献

- 広岡智子(2004). 心の中で見る子どもの虐待 草土文化
- 小林麻子・稲越孝雄・会沢信彦(2009). 図式的投影法を用いた母親の家族認識(1) — 原家族に対して — 文教大学生生活科学研究, 31, pp.285-294.
- 小林麻子・稲越孝雄・会沢信彦(2010). 図式的投影法を用いた母親の家族認識(2) — 青年期の家族関係 — 文教大学生生活科学研究, 32, pp.99-108.
- 小林麻子・会沢信彦(2011). 図式的投影法を用いた母親の家族認識(3) — 結婚、妊娠、出産を通して — 文教大学生生活科学研究, 33, pp.147-156.
- 水島恵一(1979). 「体験と意識」 研究の方法論 体験と意識に関する総合研究第1集 1-8.
- Stern, D. N. (1985). The Interpersonal World of the Infant : A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology. New York : Basic Books, Inc. (スターン D. N. 小此木啓吾・丸田俊彦(監訳)(1998). 乳児の対人世界 理論編 岩崎学術出版社)
- 上杉喬(1984). 図式投影法とイメージ 水島恵一・小川捷之(編) イメージの臨床心理学 pp.190-196 誠信書房
- Winnicott, D. W. (1964a). The Child, the Family, and the Outside World Part One : Mother and Child. Harmondsworth, Middlesex, England : Penguin Books. (ウイニコット D.W. 猪股丈二(訳)(2007). 子どもと家族とまわりの世界(上) 赤ちゃんはなぜなくの — ウイニコット博士の育児講義 — 星和書店)
- Winnicott, D. W. (1964b). The Child, the Family, and the Outside World Part Two : The Family. Part Three : The Outside World. Harmondsworth, Middlesex, England : Penguin Books. (ウイニコット D. W. 猪股丈二(訳)(2007). 子どもと家族とまわりの世界(下) 子どもはなぜあそぶの — ウイニコット博士の育児講義 — 星和書店)